

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今年度は、毎月第3金曜日に、奄美の伝説や昔話などを紹介する「奄美群島12市町村」シリーズをお届けします。

第4回目は宇検村の昔話「鬼と三人兄弟」です。

昔、ある村に、母親と三人の兄弟が暮らしていました。

ある日、母親は漁に出かけました。沢山の魚がとれたので、母親は大喜びで家に帰りました。ところが、その途中、鬼と出会った母親は、鬼にペロリと食べられてしまいました。

鬼は、子どもたちも食べてやろうと考えて、母親のふりをして、家にやってきました。母親になりすました鬼は、「おうい、おうい。子どもたち。今日は大漁だよ。今夜はごちそうだ。ところで、鍋はどこにあるの。」と尋ねました。三人は、「今日のお母さんは、少し変だぞ。」と思いながらも、「鍋は、ここだよ。ここ。」と教えました。

鬼は今度は、「包丁は、どこにあるの。」と尋ねました。子どもたちは、「包丁のある場所も知らないなんて、おかしいぞ。お母さんじゃないかもしれない。」と思いながらも、気づかないふりをして、「包丁は、ここだよ。ほら。」と教えました。

夕食が終わると鬼は、「さあ、さあ、もう寝よう。明日も早い。」と、せきたてながら寝る準備を始めました。三男がこっそりと、二人の兄たちに、「あれは、お母さんじゃないぞ。決して、お母さんと二人きりになるんじゃないぞ。」と、耳打ちしました。

鬼は、三男を自分のそばに、次男をその隣りに、長男をはしっこにして眠らせました。三人は、寝たふりをして母親の様子をうかがっていました。

真夜中になると、母親は、むっくりと起き上がりました。すると、口もとから、ニョキニョキと、するどい牙が生えだしました。そして、三男の顔をのぞき込みました。三男は、知らないふりをしながら、突然、「便所に行きたい。」と、泣き出しました。びっくりして、母親の姿に戻った鬼は、「さあ、お母さんが、連れて行ってやろうか。」と言いましたが、三男は、「俺は、お母さんと便所に行ったことは、一度もないよ。いつも、兄さんたちと三人で行くんだよ。」と答えると、鬼は、「それなら、お前たち三人の体に、縄をくくりつけておくから、引っ張ったら、帰ってくるんだよ。」と言い聞かせて、三人の体を、縄でくくりました。

三人が家の外の便所に着くと、三男が、「あれは、お母さんじゃない。鬼だよ。俺を食べようとしたんだ。」と言いました。三人は、縄をほどいて、便所の柱にくくりつけると、一目散に逃げ出しました。鬼は、何度も縄を引っ張りながら待っていましたが、いっこうに帰ってきません。「しまった。気づかれてしまったか。気のきく奴らだ。」とつぶやきながら、慌てて便所に行ってみると、三人の姿はなく、縄は柱にくくりつけられていました。鬼はカンカンに怒ると、頭から二本の角が生え、口もとからは、牙がニョキッと長く伸び出してきました。

鬼は、美味しい獲物を取り逃がしてなるものかと、三人を捜し回りました。鬼が池のそばを通りかかると、池の中に三人の姿が見えました。鬼は、三人が池の中にいると思い込んで、池の水を全部飲み干してしまいました。すると、鬼のお腹は、まるで風船のようにパンパンに膨らんでしまいました。

その姿が、あまりにもおかしかったので、長男は思わず吹き出してしまいました。そのせいで、せっかく松の木の上に隠れているところを、鬼に見つかってしまいました。

母親の姿に戻った鬼は、優しい声で、「子どもたちよ。お前たちはここにいたのかい。お母さんは、捜し回ったんだよ。」「お前たちは、どうやって、この大きな松の木によじ登ったんだい。」と尋ねると、三男は、「お尻を先にして登ったよ。」と答えました。鬼は、言われたようにやってみましたが、どうしても登れません。そこで、もう一度尋ねると、今度は次男が、「お腹を先にして登ったよ。」と答えました。鬼は、やってみましたが、大きなお腹では、どうしても登れません。そこで、今度は、「お前たち、どこを先にして登ったんだい。」と尋ねると、長男が、「頭を先にして登ったよ。」と教えてしまいました。鬼は、頭を先にすると、スルスルと木を登ってきました。

鬼が、松の木の真ん中まで登ってきたとき、三男が天に手を合わせて、祈り始めました。「お天 道様、お天道様。助けてください。私たち三人がかわいいなら、絹の綱・繭の綱を下ろして助けてください。かわいくないなら、灰の綱を下ろしてください。」

すると、天から、絹の綱・繭の綱がすうっと下りてきました。三人は綱を伝って、天に登って行きました。三人を捕り逃がしてしまった鬼も、真っ赤になりながら、天に向かって同じように、「私がかわいいなら、絹の綱・繭の綱を下ろしてください。かわいくないなら、灰の綱を下ろしてください。」と祈りました。すると天からするすると綱が下りてきたので、鬼は慌てて綱に飛びつき、どんどん登っていきました。

ところが、鬼が途中まで登ると、綱はぷつぷつ切れて、鬼は真っ逆さまに下のススキ野原に落ちて、沢山の血を流して死んでしまいました。

お天道様が鬼に下ろした綱は、灰の綱だったのです。

今でも、ススキの根元を切ると、切り口の真ん中が赤いのは、このときの鬼の血のせいだと言われています。

さて、みなさんは「鬼」について考えたことがありますか。

先程のように、鬼が人間を食べようとして、人間が鬼から逃げる話というものは、昔からたくさんあります。

今回のお話では、三男がいち早く異変に気づいて、機転をきかせて鬼から逃げることに成功します。しかし、せっかく木の上に隠れていたのに、長男のせいで鬼に見つかってしまいました。さらに長男は、木の登り方も鬼に教えてしまいました。絶体絶命の大ピンチを救ったのは、またしても三男でした。「しっかり者の三男」と「うっかり者の長男」の対比が興味深いですね。

奄美図書館には、このような面白い本がたくさんあります。ぜひ図書館にいらして、いろいろな本を手にとってほしいと思います。職員一同、みなさまのご来館を心よりお待ちしております。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。